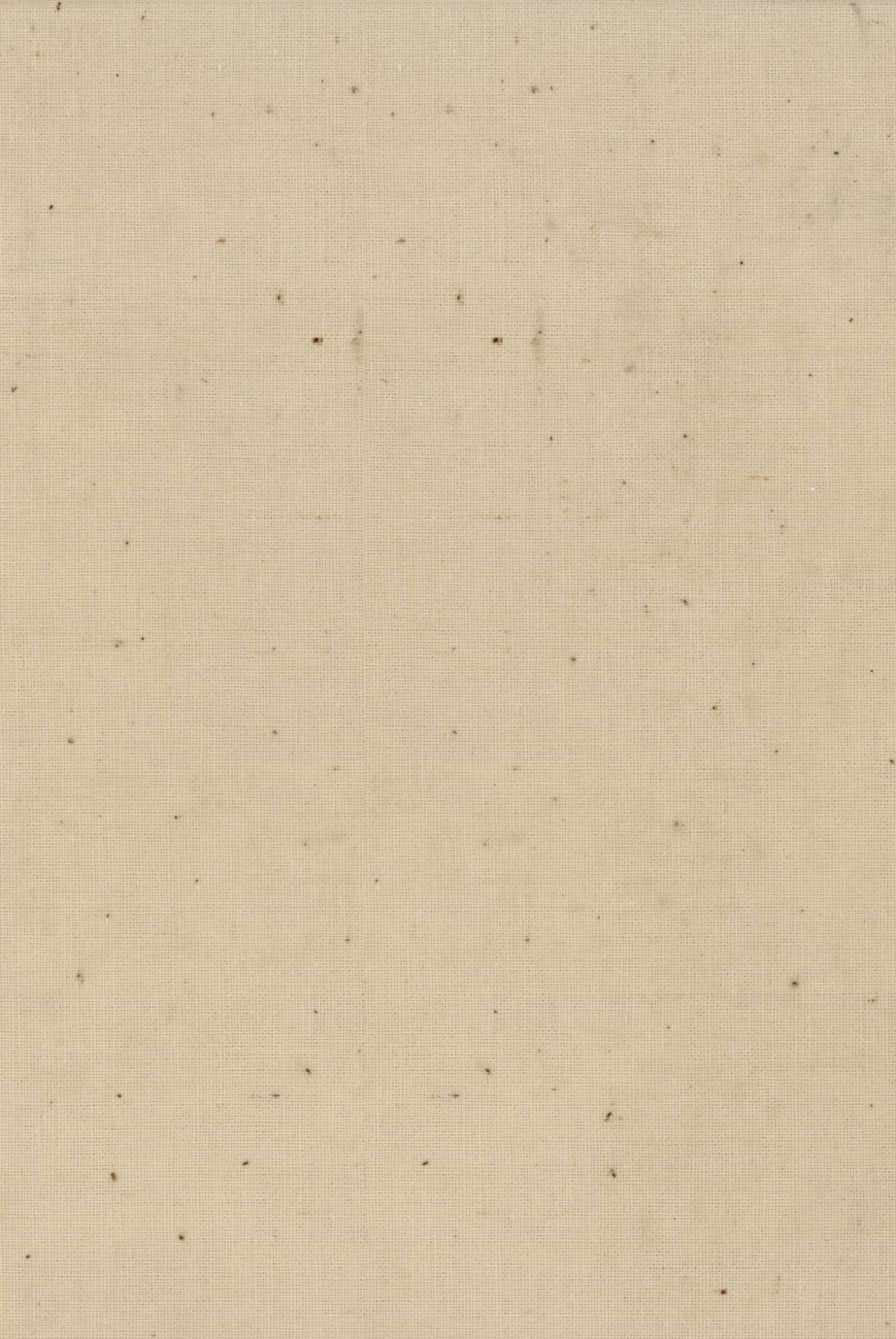




語の文学

泉八雲作品集 3

河出書房新社

小泉八雲作品集 3

——物語の文学——

一九七七年八月十五日初版

訳者 森亮／平川祐弘／仙北谷晃一／酒本雅之／奥田裕子

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

電話 ○三―三五五―五三一―

振替 東京〇―一〇八〇二―

印刷 株式会社亨有堂印刷所

製本 加藤製本株式会社

定価は函・帯にあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

耳なし芳一	7
おしどり	18
僧興義の話	21
鏡と鐘と	29
食人鬼	36
青柳物語	43
鏡の乙女	55
菊花の約	62
果心居士	68
梅津忠兵衛	77
お貞の話	82
十六桜	87
雪女	89
貉	95
勝五郎の再生	99

阿弥陀寺の比丘尼 113

生神様 125

漂流 147

ある保守主義者 156

心中 186

赤い婚礼 195

君子 222

ある女の日記 237

禅書の一問 270

メキシコ人の感謝 277

泉の乙女 280

事実は小説よりも奇なり

288

解説——平川祐弘 295

小伝・年表——森亮 315

裴慎
辻村益朗

小泉八雲作品集

3

— 物語の文学 —

耳なし芳一

耳なし芳一

今からもう七百年以上も前のことになるが、下ノ関の壇ノ浦で源平の戦いがあった。源氏と平家との間に長く続いた争いの最後の決着をつける戦いだった。平家一族は女子供もろともすっかり滅ぼされ、後世の人々に安徳天皇として記憶されている幼い天皇も、この時水中に沈む身となられた。以来、七百年の間、海にも岸にも亡霊が立ち現われた。私は別の箇所で、この浜に棲む平家蟹^{註1}のことをお話しした筈であるが、これは本当に不思議な蟹で、甲羅が人間の顔のようになっており、平家の武士達の亡霊であるとも言われている。このほかにも、壇ノ浦にはまだいくらかでも気味の悪い話がある。闇夜には、幾千とない火の玉が海岸をさ迷ったり、波間を飛び交^かったりする。漁師達は、この青白い火のことを鬼火と呼んでいる。風が吹きすさぶ日には、海の向こうから合戦の雄叫^{おたけ}びにも似た声が聞えない時はない。

しかし、平家一族の亡霊は、昔は今よりもっとひどい狼藉を働いた。夜中に通りかかった船を沈

めようとしたり、泳いで来る者を見つければ、たちまち水底に引き摺り込んだりしたものである。赤間ヶ関に阿弥陀寺が建てられたのは、こういう霊を慰め鎮める為だった。浜の近くには墓地も設けられ、そこに安徳天皇の御名とその家臣達の名を刻んだ石碑が建てられた。寺では平家一門の冥福を祈る為に毎日お経があげられた。こうして寺が建てられ、墓も出来ると、平家の亡霊は以前ほどの悪さをしなくなったが、それでもまだ時々奇妙な事が起こっては、亡霊達が成仏し切ってはいないことを告げるのだった。

今から何百年か前に、赤間ヶ関に芳一という名の盲人がいた。芳一は琵琶を弾くのが上手だというので名が聞こえていた。小さい頃から語りや琵琶を習い始め、すぐに師匠を凌ぐ腕前になった。とりわけ源平の戦記物語が得意で、中でも壇ノ浦の戦いを琵琶に合わせて吟ずる時は、「鬼神をも動かす」と言われるほどだった。

琵琶法師になりたての頃、芳一は大層貧乏だった。が、阿弥陀寺の和尚が詩や音曲が好きで、よく芳一を寺へ招いては何くれとなく面倒を見てくれた。和尚は芳一の琵琶に感心して、寺へ来て一緒に暮してはどうかと勧めた。芳一は大喜びでこの親切な申し出を受け入れた。寺では部屋と食事をあてがわれ、その御礼として、芳一は、和尚に仕事のない晩は琵琶を弾いて慰めた。

ある夏の晩、和尚は檀家の弔いに出かけて留守だった。小僧も和尚について行ってしまったので、

芳一はたった一人寺に残された。暑い晩のこととて、芳一は寢室の前の縁側へ出て涼んでいた。縁側には阿弥陀寺の小さな裏庭に面している。そこで芳一は、和尚の帰りを待ちながら、淋しさを紛らす為に琵琶を弾いていた。和尚は夜中過ぎになっても戻らなかった。そうかといって、部屋の中に入るには余りに暑苦しく、芳一は縁先に坐り続けた。すると、ようやく裏手の門に足音が聞こえた。足音は庭を横切り、縁側に近付いた。そうして、芳一の真前でピタリと止まった。が、しかし、それは和尚ではなかった。太くて低い声が、まるで侍が目下の者を呼ぶように言った。

「芳一！」

芳一は、驚きのあまり、しばらくは物も言えなかった。声はもう一度命令口調で言った。

「芳一！」

「はい！」盲人は声に怯えて答えた。「私は盲人でございます。どなた様がお呼びか見えないのでございます」

「恐がることはない」声は少し優しくなって言った。「わしはこの近くに宿を取っておる者で、御主君からのお使いで参った。御主君は大層御身分の高い御方で、大勢の供を従えて、今赤間ヶ関に留まっておられる。壇ノ浦の戦場を御覧になりたいとの仰せで、今日そちらへ参られた。そこでお前のことを聞き及び、是非とも琵琶を聞きたいとの望みなのじゃ。さあ、琵琶を持ってついて来るがよい。貴い方々がお待ちかねであるぞ」

侍の命令には絶対服従の時代である。芳一はわらじを履き、琵琶を携えて後に従った。侍は芳一を巧みに導いて行ったが、しかし芳一は大変な早さで歩かねばならなかった。芳一の手を引く侍の手は

鉄だった。そうして一足ごとに武具の鳴る音がするのは、多分鎧を着ているせいだろう。もしかすると城の番兵なのかも知れない。最初の恐れが過ぎ去ってみると、芳一は、これは自分にも運が向いて来たのかなと思った。この侍が、「大層御身分の高い御方」と言うところを見ると、琵琶を聴きたいとおっしゃる殿様はきつと偉いお大名に違いない……。侍は急に立ち止まった。気が付いてみると、大きな門の前に来ている。芳一は、阿弥陀寺のほかにこんな大きな門がこの辺にあったかしら、と訝った。「開門！」と侍が呼ばわると、門をはずす音が聞こえた。二人は門を通り抜けた。侍は又大声で呼ばわった。「ただ今、芳一を連れて参りました」すると足音が急ぎ足で近付き、襖や雨戸が開かれて、中からは女達の話し声が聞こえた。その話す言葉から、この女達は立派なお屋敷のお女中だということが分かった。けれども、どんな所に連れてこられたのか芳一には見当もつかなかった。そうして、それを考える余裕もなく、石段を登るように促され、五、六段登ったところでわらじを脱ぐようにと言われた。お女中の手が芳一の手を取って、いつ果てるとも知れぬ長い廊下を滑るように導いて行った。数えきれぬほどの角を曲がり、広い広い畳敷きの部屋を通り抜けて、とうとう大きな部屋の真中まで来た。そこには大勢の人々が集まっているらしく、衣摺れの音が木の葉のそよめきの^へ。低い話し声が響いていたが、その言葉はいずれも宮中で使われるものだった。
土蒲団に坐ると、琵琶の調子を合わせた。すると、老女らしい人が芳一に向かって言った。

「さあ、琵琶に わせて、平家物語を語るようにとの仰せです」

平家物語を全 語るには幾晩もかかるので、芳一は思い切って尋ねた。

「話は長く、とても一晚では語れません。どの部分がよろしうございましたか」

老女は答えた。

「壇ノ浦の戦いをお語りなさい。あれが一番あわれ深く、心を打たれます」

そこで芳一は声を張りあげ、苦しい海での合戦の模様を語った。琵琶をかき鳴らしながら、櫓を漕ぐ音、舟が急に舳の向きを変え、時の波の音、弓矢が空中を飛び交う音、兵士達の叫び声や、足を踏み鳴らす音、兜に打ち下ろされる太刀の音、そして、討たれた者が海に落ち込む音などを、それは巧みに表わした。琵琶が鳴り止むと、右にも左にも聞こえるのはただ感嘆のつぶやきばかりだった。

「何という素晴らしい技であらう」「これほどに見事な琵琶は未だかつて聞いたこともございません」

「いや、国中を探しても芳一ほどの者はおりますまい」すると芳一は益々元氣付けられて、前よりも一層上手に演じた。そうして、周囲の感嘆も益々深まるばかりだった。さて、いよいよ芳一が女や子供達の最期を語ると、とりわけ二位の局が幼い天皇を腕に抱いて水中に沈むところまで来ると、人々は長い長い苦悶の叫びをあげた。そうして、あまりにも激しく声をあげて泣くので、芳一は自分の引き起こした悲しみが恐ろしくなってしまうほどだった。吸り泣きと嘆きは長いこと止まなかったが、それでもようやくあたりが鎮まると、さきほどの老女らしい人が言った。「かねてより噂には聞いておりましたが、今宵の琵琶はまことにまことに見事でありました。殿様も大層お氣に召され、何か褒美を賜わるとの仰せです。殿様はもう六日間当地にお留まりなされるので、その間、毎晩琵琶を弾いてお慰め申し上げて欲しいのです。明日も又同じ時刻に、使いの者を遣りましょう。それに、もう一つだけ断っておきますが、今宵のことは殿様がお発ちなされるまで、決して誰にも言ってはなりません」

ぬ。この度はお忍びの旅であらせられますから。さあ、これでもうお退きがりなさい」

芳一はうやうやしく礼を述べ、お女中に導かれて入口のところまで来た。そうして、そこから先は例の侍が寺の裏庭の縁側まで送り届けてくれた。

芳一が戻った時はもう夜明け近くになっていたが、誰も芳一が寺を出たのに気付かなかった。帰りが遅くなった和尚は、芳一が寝てしまったものばかり思っていた。芳一は昼の間に休息を取り、昨夜の不思議な出来事については一言も洩洩らさなかった。真夜中になると、又昨日の侍が迎えにやって来て、芳一は昨夜と同じ成功を収めた。けれども、今度は偶然に、寺を留守にしたのが見つかってしまった。朝になって寺へ戻ると、和尚が芳一を呼び寄せて、優しく咎めるように言った。

「芳一や、皆でお前の身を案じていたのだよ。お前は目が見えないのだから、一人で出かけたりして危ないではないか。一言そう言ってくれば、供の者をつけたのに。一体どこへ行っておったのじゃ」

芳一は言葉を濁して、

「はい、和尚様、申し訳もございません。実は、ちょっと用事がございまして。昼の間に果たせなかったもので……」

和尚はこんな言い逃れを聞くと、悲しいよりもびっくりして、これは徒事ではない、何か訳があるに違いないと思った。芳一が悪霊たふらに誑たぶらかされているとしたら大変である。和尚はもうそれ以上は何も

訊かず、密かに寺男達を呼び寄せて、芳一の挙動によく気を付けるように、そうして、もし日暮れになつてから寺を出るようなことでもあれば、芳一の跡をつけるようにと命じた。

その晩も芳一は寺を出て行つた。寺男達は、すぐさま提灯を手にして跡をつけた。雨の降る晩で、外は真暗だった。男達が通りへ出ると、もう芳一の姿は見えなかった。考えてみれば、盲人でありながら、こんなにも悪い道をあんなにも速く歩いて行つてしまふとは奇妙である。男達は、芳一がよく行く家を一軒一軒訪ねて回つた。けれども、誰一人として芳一を見かけた者はなかった。男達は仕方なく、海岸沿いの道を通つて帰ろうとした。すると、驚くではないか、阿弥陀寺の墓地の方から狂おしいような琵琶の音が鳴り響いてくる。あたり一面真暗で、ただそういう晩によくあるように、鬼火がゆらゆらと舞つていた。男達は墓地へ駆け込み、提灯の明りを頼りにやつこのことで芳一を探し出した。芳一は、たった一人雨に打たれながら、安徳天皇のお墓の前で、壇ノ浦の戦いを語りつつ、琵琶をかき鳴らしていたのである。芳一の後にもまわりにも、墓地一面に鬼火がゆらめいて、まるでろうそくの火のように燃えていた。これほど沢山の鬼火が一度に舞うことなど、かつてなかったことだった。

「芳一さん！ 芳一さん！」寺男達は大声で言つた。「芳一さん、騙されているのですよ！」

ところが、芳一は一向に耳に入らぬ様子で、琵琶を弾き続け、一心不乱に壇ノ浦の戦いを語るのだった。寺男達は芳一の衣をつかみ、耳のはたで怒鳴つた。

「芳一さん！ 芳一さん！ さあ、すぐに帰りましょう！」

芳一は言った。

「高貴な方々の面前で、そのようなお振舞は無礼というものでございましょう」

この答えを聞くと、寺男達は氣味が悪くなる一方で、思わず吹き出してしまった。芳一が悪霊に誑かされているのもう明らかである、衣をつかむと、無理矢理立ち上がらせて、引つ立てるようにして寺へ連れて帰った。和尚は先ず濡れた着物を取り換えさせ、飲み物と食べ物を与えた。そうして、芳一に、一体どうしてこんなことになったのか、その訳を聞かせてくれと言った。

芳一は長いことためらっていたが、親切な和尚にこれ以上心配をかけては悪いと思いなおし、とうとう一部始終を打ち明けた。

芳一の話聞き終ると、和尚は言った。

「これは大変なことになった。芳一や、お前、どうしてもっと早くこのわしに教えてはくれなんだ。かわいそうに、お前の芸が不幸を招いたのだよ。もう今では分かったろうが、お前は毎晩お屋敷ではなくて、平家の墓を訪ねておったのじゃ。さっきも寺男達は、お前が雨に打たれて、安徳天皇のお墓の前に坐っているところを見つけ出したのだ。お前が見ていたのは、あれはみんな幻覚で、人間の声だと思つたのは亡者の呼び声だったのだよ。一度亡者の言うなりになってしまえば、もう絶対に逃れられぬ。そうして、再び亡者に従えば、今度はお前は八つ裂きにされてしまうのだ。ともかく、お前はいつかは殺される筈だったのだ……。ところで、わしは今晚お弔いがあつて、他家へ出かけねばならぬ。お前と一緒にいてやりたいのは山々だが、そうもゆかぬ。出かける前に、お護りのお経の文句をお前の体を書いていってあげよう」